

大学3年生における進路決定の過程と進路に対する意識の変化

——グラウンデッド・セオリー法による検討——

柴田 康 順

I 問題と目的

近年の雇用不安から、わが国では若年者の雇用問題が注目を集めており、特にフリーターやニートなどは『青年期への意図的な滞留（諸井，2002）』であるとするなど、職業選択を心理発達の側面から解釈しようとする研究はこれまでに数多くなされている。例えば、進路決定自己効力（浦上，1996 など）やアイデンティティの状態（諸井，2002 など）との関連を調べたものや、進路選択の過程や行動についての研究（菰田，2006 など）などが先行研究として挙げられる。また、景気や情勢など社会的な要因も強く影響していることから、進路選択の問題はすべての青年、特に卒業後に進路決定を控えた大学生に関わる重大な問題であると考えられる。

しかし、従来の研究は主に社会調査法に基づく質問紙調査などによって、進路選択の際の大学生の意識を調査したものが多く、その結果、あくまで集合体としての「大学生」の現状を把握するに留まり、大学生が進路選択の過程でどのように目標を定め、どのような意識を持って準備期間を過ごしているかについてはほとんど明らかにされてこなかった。進路選択の過程で、進路に対する意識がどのように変化しているのかという点について関連づけることは、卒業後の進路決定が困難な大学生への援助に際して、有益な知見を与えることが期待される。

以上を踏まえて、大学生が卒業後の進路選択をどのように行っているのかという問題に関して、行動面や心理面からその過程を探索的に調査することを目的として本研究を行った。具体的には、進路決定の過程を重視し、進路に対する意識を鍵概念としたうえで、わが国の大学生は大学卒業後の進路をどのように決定しているのかという問題について、質的研究法の一つであるグラウンデッド・セオリー法（Grounded Theory Approach）を用いて研究することを目的とした。

II 方法

1. 対象の限定

本研究では進路選択の過程を探索目的としているため、具体的な進路選択行動を始める人が多いとされる大学3年生のみを調査対象とした。その中で「大学卒業後の進路」を一般就職（以下就活組）と、業務独占となる資格取得を前提とする就職（以下資格組）に限定した。いずれも学生生活を終え、社会人として働くことを前提としている点で共通しており、大学卒業後の進路に対する意識がより顕著に表れていると考えられるためである。これに対して進学や学部編入を進路目標としている人は、引き続き学生生活を送ることになるため、進路選択の意識が前二者ほど強くないのではないかと考え、本研究では調査対象から除外した。

また、就活組は企業の内定を得るところまで、資格組は資格取得までを目標と定義する。就活組は内定を得れば大学卒業後その企業で働くことができ、資格組は資格を取得すれば、職業登録をすることによって業務を開始することが原則として可能となるためである。一方で、これらの目標には職業の専門性という点において明確な違いがある。就活組は企業の内定を得ることが目標であると定義したが、ここで言われる企業は特定のものとは限らず、その数も1つとは限らない。これに対して資格組は特定の資格を取得することのみが目標となるため、その数は1つに限定される。したがって、目標の限定性という点において就活組と資格組は明確に区別されるため、進路目標に対する意識に差異が生じる可能性があることを考慮して調査を行った。

2. 調査の手続き

2.1 調査時期 2005年12月～2006年1月

2.2 情報提供者 情報提供者（以下 info.）は首都圏の大学3年生4名である。前節で述べたように、対象者は就活組と資格組に限定されているので、事前に info. に対して希望進路を尋ね、各人数が均等

になるように配慮した。

2.3 調査方法 進路選択の過程や目標に対する意識を探索的に研究するため、質的研究法を採用し、1人あたり40～60分の半構造化インタビューを行った。半構造化インタビューに使用した質問項目は、info.の語った内容を反映して、分析ステップごとに修正や追加が行われた。最終的な質問項目は表1のとおりである。

Ⅲ 結果と考察

1. 分析の手続き

データの分析方法には、発話データをデータに即した形でまとめあげていくのに適しているとされるグラウンデッド・セオリー法を採用した。この手法は、質的研究法の手続きの中で最も手続きが体系化されているという利点もある。面接の逐語記録を起こして発話データとし、①切片化、②コーディング、③カテゴリー生成、④カテゴリーの精緻化、⑤仮説・モデル生成という過程で分析を行った。いずれの段階においても随時データを参照しながら作業を進めることで、分析がデータに基づいているかに注意した。これらの手順は①から⑤へ一方向的に流れていくものではなく、ステップが改まるごとに①～④を繰り返すという循環的な作業であった。また、⑤の最終的な仮説などは調査分析が終了した後で生成したが、分析過程においても生成されたカテゴリーなどから、その時点での考察や仮説生成は随時行った。

本研究はinfo.が4名であり、1人ずつデータ収集と分析を行ったため、分析過程を4つのステップに分けて行った。その際、理論的サンプリングとして就活組と資格組のinfo.を交互に選出することで、進路に

応じてカテゴリーの生成・洗練の過程に偏りが生じないように工夫した。info.の進路選択の過程や意識が就活組と資格組といった方面の違いを超えて、何らかの共通した要素が現れる可能性があると考えたためである。しかし、当然希望する進路に特有の要素が現れることも予想されるので、相違点に関しては随時述べていくことにする。なお、分析ステップを通してのカテゴリーの変遷は表2の通りである。

2. 継続的比較分析

2.1 ステップ1

目的：先行理論がない中で、大学3年生がどのように進路を選択しているのかを理解するための足掛かりとする。

info. A：首都圏国立大学3年生男子（22歳）法律系資格取得希望者

資格組の方が、進路目標が明確に1つに定まっているという理由から、進路に対する意識がより顕著に現れるのではないかと考え、最初のinfo.に資格組を選択した。また、過去に資格試験の受験経験がある場合、進路に対する意識が進路選択時から変化している可能性があるため、info.の選定に際して「資格試験を4年時に初めて受験する」という条件を付けた。

分析方法：切片化したデータをコーディングし、それをまとめてカテゴリー生成した。

結果と考察：このステップでは、進路に対する意識も含め、進路選択の過程がどのように進められているのかという点を中心に、その嚆矢となるカテゴリーを生成した。カテゴリー・グループ（以下CG、《 》で表現）としては、《進路選択の過程》、《進路への意識》、《職業観》の3つが得られた。

《進路選択の過程》で得られた〈大学選択〉という

表1 半構造化インタビューで使用した質問項目

<ul style="list-style-type: none"> ・進路をどうしようと考えているか（「その進路を目指している自分」を意識してもらうための導入） ⇒いつ頃決めたのか ・進路を決めるきっかけとなったことは何か ・他の進路との間で迷いはなかったか ・別の進路に進もうと思ったことはないのか ⇒別の進路に進む人をどう思うか ・大学院進学or学士編入をして、大学に残る人をどう思うか ・進路選択の際、悩みはなかったか ・進路に関して誰かと相談したか ⇒誰と相談したのか。どのようなことを相談したのか ⇒相談して何が変わったのか（ステップ3にて追加） ・その職業に最も重要だと思われる点は何か ・同じ進路を目指している人と自分を比べてどう思うか ・その職業に就くために何をしていきたいか（ステップ2にて修正） ・その職業に就いた後どうしていきたいか（ステップ2にて修正） ・その職業に就けなかったらどうするか（ステップ2にて修正）

サブ・カテゴリー（以下 SC、〈 〉で表現）から、大学入学以前から将来的な進路に対する意識がすでに存在していたことが示唆される。ここから、大学入学時まで A の将来的な進路に対する意識に影響を与える要因が存在すると考えられるが、A の語りから、〈迷い〉は〈進路選択の時期〉以前にのみ生じるものではなく、進路選択後でも他者との関わり合いの中で生じるものであることが示唆される。

《進路への意識》は〈専念〉、〈自分との勝負〉、〈自信〉からなるが、ステップ 1 においては SC 同士の明確な関連は見られなかった。

《職業観》は〈充実感〉、〈人のためになる〉、〈経済的な自立〉で構成される。〈経済的な自立〉は、『親に対して金銭的な負担をかけたくない』という語りから生成されたものであり、データとしてあまりにも不十分であるが、他のカテゴリーに含まれる内容ではないため、このカテゴリーについての考察は後続するステップで行う。

2.2 ステップ 2

目的：就活組から情報を得ることで、ステップ 1 で生成されたカテゴリーを洗練する。2 つの進路希望に共通する要因となるカテゴリーを生成すると同時に、両者が明確に区別される要因を探る。

info. B：首都圏国立大学 3 年生男子（22 歳）就活組
分析方法：ステップ 1 で生成したカテゴリーを利用してステップ 2 の切片の理解を試みた。ステップ 1 で生成したカテゴリーでは切片を適切に表現することが困難だと思われたものについては、ステップ 1 のデータも併せて検討しなおし、カテゴリーを再編成し、新たなカテゴリーを生成した。以下ステップ 4 まで同様の過程で分析を行う。

結果と考察：新しいデータを加えたところ、以下のような変更点が見られた。まず、CG に《他者との情報交換》が加えられた。A も他の受験生と自分を比較したり、予備校で弁護士の具体的な職務内容や役割を聞き感銘を受けたりしているため、A も他者から情報を得て、その影響を受けていると思われる。しかし、A は他の受験生と試験後に希望する進路などについて情報交換することはなく、試験はあくまで〈自分との勝負〉と捉えていることから、資格組は資格取得の過程では《他者との情報交換》によって自己変革が起こるようなことは少ないのではないかと考えられる。一方、B はインターンシップなどで社会と直接関わる機会を持ち、多くの情報を得ることで自分の意外な本質を知ることができたと語っている。B は外部からの情報を

積極的に得ることで自分の視野を広げており、就職活動において人間関係の影響は無視できない要因であるようだ。そのため B からは、他者からの影響をあまり重視せず、自分のスタイルを貫くという〈自分との勝負〉は生成されず、代わりに〈意外な自分が分かる〉が生成された。これらのカテゴリーはそれぞれの進路特有の要素である可能性がある。

また、ステップ 2 ではステップ 1 で生成されたカテゴリーとはやや異なるカテゴリーが生成された。まず、〈進路選択の時期〉を〈転機〉に内包する形で削除した。後者は意識や状況の変化を示すが、語りの内容から進路選択の際には進路に対する意識がより強くなっていると考えられるため、〈転機〉として差し支えないと判断した。

次に、〈専念〉に当てはまる語りが得られなかったが、A の以下のような語りから、〈消去法〉を新たに生成した。

『あまり、あのーサラリーマン、やりたいなと思わなかったのもあって、自分の力でやれる仕事があれば、あの、すべて命令に従ってみたいなのよりは、自由で面白いかなと思ったので、決めました。』

意味合いとしては類似のカテゴリーであるが、〈消去法〉は選択肢を限定する手段、〈専念〉は選択後に他の進路を考えないようにするために行われるという文脈で語られているため、時系列的に性質が異なると思われた。したがって、〈専念〉は削除せず、このステップでは判断を保留する。

〈充実感〉に関しては、B は職業に限定せず用いていたため、〈知識・経験を生かす〉に再編成した。しかし、A の場合これらのカテゴリーが直接結びついていないのに対し、B の場合は必ずしも職業自体に充実感を求めているわけではない。ここには、就活組は第 1 志望の企業から内定が得られるとは限らないという不確実性が影響している可能性がある。つまり、職業生活の充実感以上に、自分の知識や経験が生かせる企業に内定することを重視していると考えられた。これらのカテゴリー同士の関係を考慮すると、就活組は充実感そのものを求めているとは考えにくく、後者のカテゴリーを中心にカテゴリーを再編成することが適切であろう。さらに、このカテゴリーは進路選択の要因に密接に関係しているため、《進路選択の過程》の SC に移行した。関連した要素として、『仕事に必要な技能を進んで身に付けたい』という語りもあったが、A に該当する語

りがないためカテゴリーの生成は保留した。

ステップ1で保留した〈経済的な自立〉であるが、Bにも『*金銭面で親に迷惑をかけたくない*』、『*自分の力で稼ぐ*』という語が見られたことから、〈経済的な自立〉を生成して問題ないと判断した。

ところでステップ1で、大学入学以前から将来的な進路に対する意識に影響を及ぼしている要因の存在が示唆されたが、これに関してBは親の職業を挙げている。しかし、Aには該当する語が見られないため、カテゴリーとして生成するにはデータ不足として、後続のステップで判断する。

2.3 ステップ3

目的：ステップ2では2つの進路について共通する要素と異なる要素の存在が示唆された。資格組を中心にカテゴリーを精緻化することを目的とする。

info. C：首都圏国立大学3年生男子（21歳）公認会計士資格取得希望者

Aと異なる点として、資格受験の経験者を選択することで属性の幅を広げた。

結果と考察：新しいデータを加え検討したところ、カテゴリーの再編成が行われた。ステップ2で新たに得られた《他者との情報交換》に加え、同じくステップ2で示唆された〈親の職業〉が生成されたことから、それらの上位カテゴリーとして新たに《他者からの影響》というCGが生成された。

〈迷い〉は進路選択の過程において他の進路との間で生じるものであるが、Cはサークル活動との兼ね合いで迷うという、進路選択自体への躊躇いを語っていた。そのため、進路に対する〈揺らぎ〉としてこのカテゴリーを再編成することで、進路選択以前に限定されず、進路選択後の意識の変化としても対応できるカテゴリーとなった。

〈経済的な自立〉は金銭面にのみ着目したものであったが、『*早く社会に出たい*』という語りから、親からの精神的な自立という要素も含まれると考えられるため、〈親からの自立〉として再編成した。

ステップ2では見られなかった〈専念〉は再び確認された。ここから、進路選択後の意識の揺らぎを抑えるために、現在の進路にのみ集中するという手段が用いられることが示唆された。消去法によって進路選択時に既に棄却された進路への迷いは、進路選択後に再び生じることがあり、それを防ぐための手段として現在の進路に〈専念〉する必要があると思われる。これに対してBは、受験勉強は苦手と語り、早々に資格取得という選択肢を消去している。実現が困難な進路

に対しては、消去法で棄却された後、再び選択肢として浮上するとは考えにくく、現在の進路と同等の魅力を持する可能性は低いため、結果的に就職活動に専念することになっていると考えられる。

ステップ2では進路に応じた異なる要素の存在として、就活組に特有な〈意外な自分が分かる〉、資格組に特有な〈自分との勝負〉を挙げたが、Cは資格組と就活組を以下の語りのように対照的なものとして捉えている。

『*就活っていうのは企業説明会だとか、まあ公の場で、周りも学生で、その中で言葉を投げかけたりしてディスカッションしたりとか、自分を表現する術を身につけたりだとか、自分のことをよく知ったりだとか、そういう意味でやっぱりオープンな感じがするんです、開けた感じが。それに対して資格っていうのは、資格の中で友達とか作ってグループになるってことはあっても、結局は結果を出さなきゃいけないのは自分だけで……（中略）……就活とかは多分和気藹藹とやってたら他人から言われたことで自分の新たな一面を知ったりとかして、それが内定の自己アピールとかにつながることもあるのかもしれないですけど、おそらく資格に関しては、できるかできないかっていうのはおそらく会話の中で身につくようなことじゃない。だからそういう意味では、机に向かうのと閉ざされたイメージの資格と、オープンなイメージの就活は対照的だと思うんですけど。』*

この語りは、他者との情報交換による影響の面で両者が対照的なものであると解釈できる。就活組は他者との関わりを通じて〈意外な自分が分かる〉のに対し、資格組は客観的な得点差程度の情報しか得られず、結局〈自分との勝負〉という意識しか得られない。就活組は多くの企業の中から自分に合った企業を探す必要があるため、他者との関わりの中で自分をより深く理解しておく必要がある。一方、資格組は進路選択の時点で自分に合うと思われる資格が目標となるため、準備期間に自分の適性を理解する必要は少ない上に、試験に集中するため他者と関わる機会も少なくなる。両者の違いは目標自体の限定性に起因すると考えられる。また、〈自信〉は共通した要素であり、両者ともに同程度に影響を受けると考えられるが、資格組は自信が揺らぐと資格受験自体を諦めかねないという点で、目標の喪失に直結すると考えられる。

また、ステップ2で保留した『仕事に必要な技能を進んで身に付けたい』という語りはCにも見られた。ここからは〈向上心〉が伺えるが、Aに該当する語りが無いのは最早データ不足という理由ではないと判断し、「目標達成後の自己像を具体的にイメージできている人に限る」という仮説を立て、ステップ4で最終的に判断をする。

2.4 ステップ4

目的：わずか4名分という少ないデータから理論的飽和に至るとは考えられないが、本研究における最終的なカテゴリーを生成することを目的とする。

info.D：首都圏国立大学3年生女子（22歳）。就活組。

女性を対象とすることで、性別の違いに伴う進路に対する意識の差を確かめた。

結果と考察：得られたカテゴリーを最終的なカテゴリーとしてまとめた。ステップ4ではカテゴリーレベルで新たに2つの変更がなされた。

まず、〈親の職業〉が〈同性の親の職歴〉に再編成された。子どもは同性の親のイメージを自分自身のモデルとして参照すると考えられるため、自分の進路を考える際、同性の親の職業やライフスタイルを意識するのは自然と思われるが、info.は誰も進路選択に関して親と相談したと直接的には語っていない。しかし、A以外は進路選択の際に〈同性の親の職歴〉を参考にしたと補足的に語っている。では、Aは〈同性の親の職歴〉に影響を受けなかったのだろうか。以下の語りから、Aのみが大学入学以前から将来の進路が変化していないということが分かる。

『浪人になって改めて考える時間ができたので、そこで、あっ何も決めてないなあ、っていうのに気付いた時に、決めなきゃいけないってことが一番苦しかったのかもしれない……（中略）……とりあえず法学部にしようかなって決めて、で、そのときに、じゃあ法律って何なのかなっていうのを、予備校のパンフレット見ながら、考えて、ああ、法学部に行くところいう仕事に就けるんだ、ってのがわかったんで。』

Aは〈大学選択〉と同時に〈転機〉が訪れているため、大学の学部と将来の進路を1対1で対応させて意識している。一方、他のinfo.は大学入学後に〈転機〉が訪れているため、大学入学以前には曖昧であった進路目標が具体的な選択肢として意識される。そして〈消去法〉で選択肢を限定する際の判断基準に〈同性の親

の職歴〉が影響すると考えられる。以上から、大学入学以前から目標とする進路が変化していない場合、進路選択の際に親の影響を明確に意識することは少ないという仮説が立てられる。

また、ステップ2,3で保留した「仕事に必要な技能を進んで身に付けたい」という要素と、Dの語りをまとめたカテゴリーとして〈向上心〉を生成した。A以外のinfo.は、目標達成後のライフスタイルについて具体的なイメージを持っており、職業選択は理想の人生を送るための通過点に過ぎないようである。これに対して、Aは試験合格後さらに3つの選択肢が存在するため、目標達成後の自己イメージが曖昧であるが、これはAにとって試験合格が非常に困難であるが故に、いつ合格できるか分からないという目標達成までの時間制限のなさが影響している可能性がある。

3. 分析結果のまとめ

3.1 見出された仮説的知見

- ①〈大学選択〉は将来的な進路を意識して行われ、大学入学後に進路希望が明確に意識された人は〈同性の親の職歴〉の影響を強く受けつつ、現在の進路選択に至る。
- ②進路選択は〈知識・経験を生かす〉ことを前提とした〈消去法〉でなされる。
- ③大学3年生にとって〈人のためになる〉ことと〈親からの自立〉が進路選択の目的である。また、目標達成後の自己像が明確である場合、目標達成後の〈向上心〉が現れる。
- ④〈職業観〉は進路選択の過程に一貫して存在するものである。
- ⑤就活組と資格組は〈他者との情報交換〉によって受ける影響は対照的である。前者は〈意外な自分分かる〉が、後者は〈自分との勝負〉という意識しか得られない。〈自信〉は両者に見られるが、資格組の場合目標の喪失に繋がる可能性がある。
- ⑥進路選択後の意識の〈揺らぎ〉を防ぐための手段として、現在の進路に〈専念〉するという方法が取られる。
- ⑦目標達成後の自己イメージを明確に持っている人は目標達成後の〈向上心〉を持つ。

このうち、①～④は本研究の目的である進路決定の過程と密接に関係しており、⑤～⑦は準備期間における意識の変化について見出された仮説である。

3.2 生成されたモデル

本研究で得られた仮説的知見を適切に表現しうるように、生成されたカテゴリーをまとめて図示すること

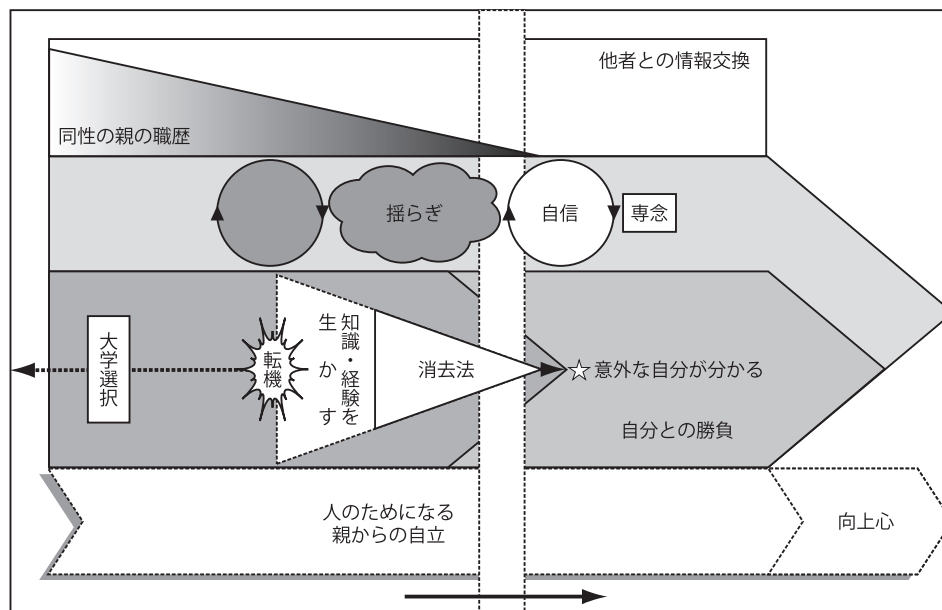
表2 分析ステップを通しての 카테고리の変遷

CG	SC	ステップ1	ステップ2	ステップ3	ステップ4
進路選択の過程	大学選択	生成			
	進路選択の時期	生成	(再編成)		
	転機		生成		
	消去法		生成		
	知識・経験を生かす		生成		
進路への意識	迷い	生成		(再編成)	
	揺らぎ			生成	
	専念	生成	(該当なし)		
	意外な自分分かる ¹	(該当なし)	生成		
	自分との勝負 ²	生成	(該当なし)		(該当なし)
職業観	自信	生成			
	充実感	生成	(再編成)		
	人のためになる	生成			
	経済的な自立	保留	生成	(再編成)	
	親からの自立			生成	
他者からの影響	向上心 ³	(該当なし)	保留	保留	生成
	他者との情報交換		生成 (CG)	SCに移行	
	親の職業	(該当なし)	保留	生成	(再編成)
	同性の親の職歴	(該当なし)			生成

¹ 就活組特有
² 資格組特有
³ 目標達成後の自己像が明確に形成されている人特有

大学3年生における進路決定の過程と進路に対する意識の変化

六



☆は進路決定を示す

図1 大学3年生の進路選択の過程と意識についてのモデル

で本研究における仮説的モデルを生成した(図1)。モデルは川喜田(1970)のKJ法A型による図解法などを参考に、カテゴリーやCGを適宜配置した上で、矢印の向きに時間軸を設定し図式化したものである。

仮説①に関して、〈同性の親の職歴〉を〈大学選択〉の右に描くことで、これが大学入学以後に影響力を持つことを表した。また、図に濃淡をつけることで大学入学以前に明確に意識されることはなくとも、影響を与えていることを表現した。仮説②は〈知識・経験を生かす〉を〈消去法〉の左に描き、三角形の中でこれらを表現することで、目標が焦点化していく様子を表した。さらに〈転機〉の後で進路選択が行われることを考慮して、前述の三角形全体をまとめて時間軸上を移動させることによって、〈転機〉が〈大学選択〉の前後どちらで経験されていても対応できる図となった。

仮説③④⑦に関しては〈職業観〉を図の最下位置に横断的に配置した上で、目標達成が現実的なものとして意識される前は〈人のためになる〉、〈親からの自立〉が中心的な関心事であるが、目標達成を意識し始め、その後の自己像が形成され始めると〈向上心〉が中心的な関心事となる様子を時間軸上に表現した。

仮説⑤⑥に関しては、〈他者との情報交換〉からの距離を表現するために、〈意外な自分が分かる〉、〈自分との勝負〉を縦に並置した。〈自信〉は〈他者との情報交換〉による影響を強く受けるため、時に〈揺らぎ〉が大きくなることもあるが、現在の進路に〈専念〉することで〈揺らぎ〉を抑えようとする。この過程は循環的な矢印によって、何度も繰り返されることを表現した。また、〈揺らぎ〉は進路決定前にも起こるため、《他者からの影響》を通して生じ得ることを示すため、図の中央に配置した。

このモデルの利点は進路選択の過程と進路に対する意識の変化を、時系列ごとに順次理解することができる点である。ちなみに縦断的な破線の四角部分は現時点を示し、それを時間軸に沿って移動させることで、準備期間においてinfo.がどのような状況に置かれているのかより多層的に把握することが可能である。

IV 総合的な考察

1. 本研究のまとめ

先行研究では、大学生が進路選択の過程でどのように目標を定め、どのような意識を持って準備期間を過ごしているかについてほとんど明らかにされてこなかった。そこで本研究では大学3年生4名に対しインタ

ビュー調査を行い、わが国の大学生がどのように進路を決定しているかを調べることを目的とした。進路決定の過程と進路に対する意識を鍵概念に、インタビュー・データをグラウンデッド・セオリー法により質的に分析した結果、表2のようなカテゴリーが最終的に生成された。これらのカテゴリー同士の関連から、大学生の進路選択に関して7つの仮説的知見を見出し、モデル生成を行った。モデルは従来の研究では十分に明らかにされてこなかった進路決定の過程や意識を、職業観や他者からの影響と関連させながら図示したものとなった。

進路決定の過程については、進路に対する意識が転換する転機が存在し、進路決定に大きな影響を与えている可能性が見出された。何らかの経験をきっかけにして、それまで持っていた進路に対する意識が変化し、進路選択に影響を及ぼすことがある。そして、自分の知識や経験、適性といった現実的制約とすり合わせながら、それに見合わない進路の選択肢を棄却していき、最終的な進路決定を行うといった方法で自分の進路を選択する大学生が多いと考えられる。その際、自分の親の影響を受けつつ進路を選択するケースも多く、幼少時から培われてきた職業イメージも、進路選択に少なからぬ影響を及ぼしていると思われる。

従来親の職業の伝承については専門的・技術的職業や安定職は継承されやすい(小川・田中, 1979)と考えられてきたが、本研究の結果からは同性の親の持つ職業観を参考にして進路決定を行うという姿勢が強く感じられた。これは同性の親の職業人イメージを強く持つほど、職業意識が強まるという鹿内(2005)の知見に近いと考えられる。しかし、鹿内は母親との心的距離が近い男子大学生は決定回避の傾向があるとしているが、本研究では特に母親に関する語りは得られなかった。この点については、Dが職業人としての母親ではなく、母親の生き方自体により強い影響を受けていることも踏まえると、職業人としての母親イメージは未だに強いものではない可能性がある。

進路に対する意識については、設定した進路目標が揺らぐことのないよう他の進路などの要素を排除し、専念するという手段が用いられるという仮説が導かれた。これは就職活動や資格試験が喫緊であるという時期的な要因が強く現れたものと考えられる。本研究の調査時期は大学3年次の冬であり、進路決定時期までの時間的余裕が無くなるにつれて、目標に専念する傾向が高くなるため、意識の揺らぎがあまり見られなくなっていた時期である可能性が高い。しかし、确实

性を重視し、失敗が許されないという意識を持って進路選択をしているならば、専念の度合いや選択肢の数などについても言及する必要があるように思うが、本研究でその語りは得られていない。もちろん各人が目標達成をより確実なものとするために、様々な工夫を凝らしていると思われるため、今後は進路目標を達成するため、如何に確実性を上げる工夫をしているかを探ることが必要になるだろう。

また、就活組と資格組との間に他者からの情報による影響の差が見られたことから、両者の準備期間の過ごし方は対照的であるという結果が得られた。就職活動では自己分析や他己分析などが重視されるが、それは特に人間関係の中で自分の本質を理解するという作業であり、自分に合った企業選択が行うために不可欠である。就職活動は他者と客観的な評価基準で競い合うという類のものではないため、他者との情報交換は頻繁に行われ、自分や企業についての情報の重要度は非常に高いと言える。一方で、資格試験は合格基準という明確な基準が存在するため、最終的にそれを満たせば資格取得ができるということから、他者からの情報が自分自身の考え方に影響を及ぼすことは少ない。この点から、進路に対する意識の違いは目標の限定性のみならず、客観的な評価基準の有無に左右される可能性が示唆される。しかし、本研究の結果からは、客観的な評価基準の存在が進路に対する意識の強さにどのような影響を及ぼしているかという点について言及することはできない。確実性の向上と関係して、今後意識の強さに影響を及ぼす要因に関して研究することが必要となると考えられる。

2. 本研究の問題点と今後の展望

本研究は、進路決定の過程と意識の関連について1つのモデルを示したことで意義はあると思われる。しかし、本研究は info. が全員大学3年生であるという対象の限定性と、4名という極めて少ないサンプル数から、分析結果が理論的飽和に至ったとは到底考えられない。

また、特に就活組が内定を得られるかどうかは、景気などの社会的要因に大きく左右される問題であるため、本研究の知見をそのままの形で進路選択の問題に援用することは適切ではない。フリーターやニートなども含めて、職業未決定者に対する支援に際しては、進路目標の設定をはじめとして、個別具体的な援助が不可欠であろう。

ところで、平沢ら(2005)は、入学時の偏差値が高い大学ほど就職に有利であると指摘したのち、入学

難易度が中以下の大学の学生を対象として、進路・職業に対する意識や就職活動の実態を概観している。その結果、大学受験の際に、大学へ行けば将来やりたいことが見つかると思って大学選択を真剣に行った学生は進路決定率が高いと述べている。本研究の info. はみな入学時の学力偏差値が上位の国立大学に所属しているうえ、将来的な進路と大学選択を対応させて考えていた点においても、対象の属性が偏っていたことは否めない。ただ、進路決定までの選択過程や意識の変化が最も克明に現れるのは大学3年次であり、それらを明確に意識した上の発言データが得られたという利点を考慮すると、本研究で得られた結果は対象の拡大にもある程度対応できると思われる。

今後は対象の属性を拡大し、より多くのデータを得ることはもちろん、就職と資格という info. が希望する進路の枠組み自体も広げていくことが求められる。また、目標達成の確実性を向上させ、進路に対する意識を明確にする要因などについて、より実証的な調査研究が必要であると思われる。

参考文献

- 平沢和司・濱中義隆・大島真夫・小山治・苅谷剛彦, 2005, 大学から職業へ—マージナルな大学生の就職活動プロセス—, 日本教育社会学会大会発表要旨集録, 57, 291-296
- 川喜田二郎, 1970, 続・発想法—KJ法の展開と応用—, 中公新書
- 菟田孝行, 2006, 大学生における職業価値観と職業選択行動との関連, 青年心理学研究, 18, 1-17
- 諸井克英, 2002, 青年における職業未決定傾向と自我同一性, 東京学芸大学紀要, 284-310
- 小川一夫・田中宏二, 1979, 父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究, 教育心理学研究, 27 (4), 272-281
- 鹿内啓子, 2005, 大学生の職業決定に関わる親の態度認知と職業人イメージの要因, 北星論集(文), 42 (2), 69-88
- 浦上昌則, 1996, 女子短大生の職業選択過程についての研究—進路選択に対する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連から—, 教育心理学研究, 44 (2), 195-203